

世界の不思議

川崎ゆきお

人は同じものを見ていても、違うものを見てい るのかも もしれない。そのため、共有して持っていたものが、そうではないことになったりする。逆に言えば、自分と同じように、そっくりそのまま他人も見え る となると、こちらの方が不思議なことだろう。そしてこちらのほうが都合が悪い。

「テーブルの上のコップは、コップとして見えておるでしょ」

「また机上論ですか、先生」

「違う。偶然今、テーブルの上にコップがあると仮定しただけだ」

「仮定そのものがテーブルトークですよ」

「テーブルトークとは、テーブルを挟んで会話をすることじゃないのかね」

「ああ、そうでした」

「さて、コップだ。これは誰が見てもコップじゃないか。まあ、ただ、感じ方は多少は違う。このコップはよくあるコップだ。そのため、自分も使っているかもしれない。または非常に似ている」

「細かい話ですねえ。先生は」

「コップに関する見え方は、多少そういうことで違うかもしれないが、まあ、大体同じように見えているだろう」

「それはコップだからですよ」

「え」

「だから、それ以上あまり深い意味はないでしょ」

「まあそうだが、コップを作ったり、コップを売っている人にとっては、また違う見え方になるだろう」

「そこまで言い出すときりがないですよ。先生」

「机の上にコップがある。これは、誰が見てもそうだ」

「はい、それはそれ以上突っ込んだ話がないからですよ。物じゃなく、物事の方じゃないですか、見え方が違うのは」

「展開が早い。物から物事へ移る過程がまだまだあるんだ。それを省略してはならん」

「そこはいいです。見え方が違うのは物事でしょ。それは意味付けが違うからでしょ」

「それも一つだ」

「では、残りは」

「意味付けるには背景がいる。その人はどうして、そういう意味付けをしたかったじゃ」

「親の欲目って言いますね、先生」

「ああ、それに近いのう。人には背景がある。ある行為には動機がある。その動機を押し出しているところの動機がまたある。この場合、動機とは言えんかもし れんがな。さらに、そういうこととはあまり関係なく、体質や気質もある。そういった色々なことで見え方が違ってくる。だから、各自各様、色々じゃ」

「結論は色々ある……ですか」

「だから、同じ物、同じ物事を見ても、見え方が異なる。この違いが難儀なんだなあ。一人一世

界を持っておるようなものでな。この差を埋めるのは不可能なのじゃ。これは個体差に近い。人の顔がすべて違うようにな」

「でも、似たような世界を見ているでしょ」

「いいところに気付いたねえ、木村君」

「僕は田村です」

「ああ、そうだったか、似ていたので」

「木村とは全然違いますよ。そんな目を見ていたのですか、先生は」

「まあ、そう騒ぐな。勘違いはよくある」

「それで、今日の講義は何だったのですか」

「これ……」

「え、何ですか」

「一回やったかなあ」

「さあ」

「同じことを以前に話した覚えがある。今思い出した。君、どうだね」

「ああ、あったような、なかったような」

「私は喋ったような気がするが」

「僕も聞いたような気がします」

「これは君じゃなく、木村君に話したのかもしれない」

「そうですか。じゃ、僕は先生からじゃなく、大山先生から聞いたのかもしれませんが」

「何だろう、この妙な空気は」

「世界は繋がっていないのかもしれませんがよ」

「え、何だって」

「思っているほど連続性はなかったりして」

「あ、そう。参考にしよう」

了